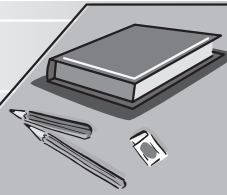


学生時代と図書館 84

一知の共同体としての図書館一

辻 豊治



まず本学図書館の話である。1920年代ペルーのマリアテギという思想家の翻訳書を出版するにあたって、どうしても参照したい本があった。が、おそらく入手できないだろうと諦めていた。それはフランスの紀行作家による日本の初期の労働運動についての著作である（Félicien Challaye. *Le mouvement ouvrier au Japon*, Paris: Librairie du Parti Socialiste et de l'Humanité, 1921）。その思想家は日本の社会主義についてのエッセーを書いているが、その情報をほぼその著作から得ていた。灯台下暗し、本学のアジア関係図書館で手に取ることができたのは、まさに感動的であった。その後、辞書と首引で逐語訳していったことも一昔の話である。現在の本学図書館の利用は、専ら美術切手のデータを得るための美術関係図書の借り出しがほとんどである。しかし、与えられたテーマは学生時代の図書館との関わりである。学生時代ははるか昔のことであり、当時の図書館についての記憶は希薄で、あまり思い浮かばない。そこで院生時代での図書館との付き合いについて記憶をたどりながら書いてみた。

前号のこのコラムで宇城先生が図書館を小宇宙になぞらえておられたが、経済史の領域では「小宇宙」という言葉はしばしば「共同体」の喩えとして使用される（大塚久雄『共同体の基礎理論』）。共同体が土地の共有とその生産物の平等な分配にもとづく生産と生活の場であるとすれば、図書館は知識の共有にもとづく知的生産と知的活動の場ということになる。

院生時代には研究テーマをラテンアメリカの近現代史、およびペルーを中心としたラテンアメリカの土地制度史と経済史に絞って、前者の研究には大学とイベロアメリカ研究所の図書館、後者の研究には当時、市ヶ谷にあったアジア経済研究所の図書館にそれぞれ豊富な資料があり、

今にして思えばラテンアメリカ研究には贅沢な非常に恵まれた環境にあった。アジア経済研究所は大学から比較的近いところにあり、お堀端に沿ってよく歩いて通った。記憶に間違いがなければ、図書の貸し出しは行われず、当時コピーは一枚50円だったので、長居をすることが多かった。大学図書館では院生は書庫に入ることができ、書庫は片隅に机とスタンドが置いてあって書棚が外光を遮る薄暗い書籍独特のかび臭い匂いがする、しかし安らぎが感じられる場所であった。授業の合間に、助手時代は仕事の合間にそこで本を読み、また原稿を書いたりなどして過ごした。こうした意味では私にとっての図書館は単に本の貸し借りの機能をもつ設備というより、居場所としての存在であった。時間を忘れて、むしろ時間が止まったようにというべきか、閉館ぎりぎりまでいたことがよくあった。これは院生の頃だったかどうか定かではないが、あるとき書庫でいつものように何かしていると、職員の方から今から消灯するので、すぐ退室するようにと言われた。もうそのような時間かと怪訝に思いながら、帰り道、土手を歩きながらふと後を振り返って見上げると、当時としてはまだ珍しかったと思うが、建物が十字に輝いていた。今日はイブだったのかと今でも寒い時期になると思い出す当時の光景である。

図書館は過去からの知の集積である本との対話の場ということになる。知が共有され、平等に分配される知の共同体である。本来の共同体は閉ざされた時空間であり、まさに小宇宙であるが、この共同体は過去にも未来にも広く開かれた知的な時空間である。ともかくいつも静かに快く迎えてくれる、飽きることのない終生の友である。

つじ とよはる(教授・ラテンアメリカ史、ラテンアメリカ経済史)